

Rio

豊田市矢作川研究所 月報

◆御田扇祭り ◆矢作川のアメリカ
ナマズの現状 ◆西の浜クリーンアッ
プ活動に親子で参加しませんか



11
2010
No. 147

豊田市矢作川研究所 〒471-0025 愛知県豊田市西町2-19 豊田市職員会館1F
TEL 0565-34-6860 FAX 0565-34-6028 e-mail yahagi@yahagigawa.jp URL <http://yahagigawa.jp>

2008年度より矢作川を水源とした枝下用水120年史編集のための調査を進めています。今春、糟目春日神社（豊田市渡刈町）宮司の神谷幸さんの御自宅でお話を伺っていたとき、部屋に飾られていた1枚のセピア色の「御田扇祭」の写真に目が止まりました。現在は規模が小さくなってしまっただけで、「扇さん」と親しまれた祭りだとお聞きしました。確かにこの写真のような祭りではなくなっているものの、

現在もなお御田扇祭に参加する29自治区区長のうちの9自治区は枝下用水の受益地にあたり、鴛鴨での聞き取り調査では、幼い頃に自分たちの地域にまわってきた祭りとして「扇さん」の思い出を聞かせていただきました。

今号は枝下用水前史ともなる御田扇祭をご紹介します。（達）

御田扇祭り

大島 建彦

江戸時代の岡崎藩は、一般に5万石として知られるが、実際には6万石を領するものであって、川西手永、上野手永、額田手永、東山中手永、山方手永、堤通手永というように、大きく6つの区域に分けられ、それぞれ大庄屋の配下におかれていた。そのような手

永ごとに、伊勢神宮から御田扇を受けており、田植えの終了とともに、神輿にこれを納めて、その区域の村々をまわすことがおこなわれた。藩主の名代の武家も、この祭りの行列にくわわり、領内の巡察をかねて、五穀の豊穰を祈るものであったと伝えられるが、在地の農民の立場で

は、西三河の一带に根づいた、虫送りの伝統をうけ継いだものと考えられる。

明治維新後の6手永では、武家の関与から離れても、村落間の連帯をたもちながら、それぞれこの御田扇祭りをいとなんできたが、しだいにその廃絶の方向にむかっていった。それでも、現に岡崎市の西南部に属する、堤通と山方との2手永では、毎年7月の時節に、それぞれ相応の行列をつくって、御田扇の神輿をまわすかたちが守られているが、かつては、年度ごとに日数をかけて、手永のすべての村々をまわしていたというのに、今日では、ただ一日に限って、つぎの地区またはそのつぎの地区に送ってゆくにすぎない。

そのほかに、現在の岡崎・豊田の両市にわたる、上野または長瀬と称する手永では、文化文政の時分まで、中園の大庄屋の岩槻家で、それ以降は、阿弥陀堂の大庄屋の伊豫田家で、御田扇の神輿をうけ継いできた。昭和30年代には、その範囲の全地区にわたって、御田扇の神輿をまわすのをやめたが、その



写真1 左から筆者・大島建彦氏と神社総代・伊豫田敏宏氏。

後もひきつづき、現畝部西町の阿弥陀堂に限って、この神輿の巡幸をおこなっている。さかのぼって、享和2年の文書には、上野手永の区域にあたる、37ヶ所の村名などが示されていた。そして、なお今日でも、通例は7月初旬の御田扇祭りには、旧来の上野手永の範囲に属して、岡崎市西北部の8ヶ所と、豊田市東南部の21ヶ所とを含む、あわせて29ヶ所の自治区から、それぞれ総代や区長などの役職者が、阿弥陀堂の西神明社に招かれるしきたりが守られている。

平成22年6月27日に、矢作川研究所の達志保氏のご案内で、御田扇祭りの実情にふれさせていただき、大庄屋家の当主の伊豫田敏宏氏から、これに関する伝承をうかがったので、ここにその要点を書きとめておく（写真1）。この祭りの日どりは、通例は7月上旬の日曜日をあててきたが、本年は選挙のために、6月下旬の日曜日にくりあげられたのである。

当日の午前10時には、西神明社の社殿で、御田扇祭りの神事が、神谷宮司を中心にいとなまれる。地元の阿弥陀堂の関係者のほかに、旧来の上野手永の範囲から、29の自治会の代表として、岡崎市内からは各総代、豊田市内からは各区長などが参列するのであるが、本年度はその1名だけが出られないので、あらかじめ奉納金を届けてきたという。ひきつづき11時前後には、その境内の会館にうつって、ひととおり直会の会食をすませると、しばらくは昼の休憩をとって、神輿の巡幸にそなえるのである。

午後の2時半から、西神明社の社殿で、神輿の発御の式があって、阿弥陀堂の自治会の役員をはじめ、その年度の宮がかりの当番など、10数名ほどが参列していとなまれる。ひきつづき3時から、御田扇の神輿を中心に、ほぼ一定の順序につらなり、西神明社の境内から出ていって、阿弥陀堂の地内をまわりあ

るき、畝部小学校の構内からひきかえし、西神明社の境内にたちもどる（写真2）。本年度は雨に降られないように、いくらか時間をきりつめたので、30分後の3時半から、神輿の還御の式があって、同じような神幸の参加者が、10数名ほど参列していとなまれ、とどこおりなく全日程をおえたのである。

この御田扇祭りの神幸では、まず宮司が祓幣をもって、四辺を祓って進み、大庄屋家の当主が塩をまいて、沿道を清めてゆく。また2人の役員が、それぞれ大幣をささげてしたが、その左右からは、それぞれ竿の先に箱の形をとりつけた、梵天とよばれるものをかかげてゆくが、その4つの面には、それぞれ「御田扇祭」「五穀成就」「天下泰平」「部内安全」としてされている。さらに、宮がかりの2人で御田扇の神輿をかついでゆき、別の一人が傘鉾に扇をさげたものをささげてゆくが、本年度の傘鉾には、13本の白地の扇と4

本の黒地の扇とをささげてあった。その傘の中に入ると、病気にかからないというので、かわるがわるこれに入っていた（写真3）。そのほかに、地元のこどもが、太鼓をたたいてくわり、また幟をささげてしたが、この幟というのは、氏子の有志に



写真3 御田扇祭りの傘鉾

よって納められたもので、「奉納御田扇神」「奉納御田扇神社」などとあって、奉納の年月と氏名とがしるされたもので、本年度の行列には、6本の白地の幟と4本の赤地の幟とをもちだしていた。

たまたま地元のにこされた、昭和8年の写真（写真4）によって、大戦前の御田扇祭りの行列は、現在の数倍の規模でおこなわれたものとうかがわれる。その行列の中には、榊俵というものをもちこんでいたが、土俵に根つきの榊を植えたものであって、御手洗川の水にひたすと、実に25貫をこえる重さであったという。そこにはまた、太鼓を



写真2 御田扇祭りの行列

たたくものだけではなく、笛を吹くものも見うけられた。しかも、その時期から今日まで、この御田扇祭りの骨格をなすものは、ほとんど変わらずにもち伝えられていたといえよう。

現在では、阿弥陀堂の自治会というものは、全体で150軒からなりたっており、旧来の農家にあたるものも、なお42軒が認められるのであるが、現役の農家としては、わずかに3軒が数えられるにすぎない。それだけの少数の農民が、相当な規模の稲作をいとなむのであって、そのほかの大多数の住民は、トヨタの^{かんれん} 関聯の会社とかかわってくらしている。そのような農村の変貌にもかかわらず。現に御田扇祭りの伝統をとどめるとともに、旧来の手永内の連帯をたもってきたのは注



写真4 昭和8（1933）年の御田扇祭り（神谷幸氏所蔵）

目されるであろう。

（おおしま たてひこ、東洋大学名誉教授）